

# キリスト教教育の主体性について

鄭 泉 聲

## 目 次

### 序

#### I. 神の恵による共同体

1. 新しい契約による者
2. 礼拝する共同体
3. 神の民
4. キリストの体
5. エクレシヤ
6. コイノニアに与る者
7. この「道」の者
8. 主の訓練を受ける者

#### II. キリスト教教育の主体

#### III. 結語

#### 註

#### 参考文献

## 序

キリスト教教育を、単にそのプログラム及び教学法にのみ精を出して行うよりも、先づキリスト教教育の神学的根拠をつきとめ、その主体性を究明してのち、それを基盤にして進めて行くことこそ、根本の、且つ正しいありかたである。

1780 年、イングランドのグローセスターで始められた、ロバート・レイクス (Robert Raikes) の日曜学校は、或る意味で、今日のキリスト教教育の先駆者であったことには間違いないが、こゝ三十年来、世界的に関心を呼び起したキリスト教教育とは、厳格に言って、同一のものではない。何故なら、たゞ日曜日に工場附近の貧しいこどもたちを自分の家に集めて、読み書きを教え、聖書を教えた個人的な奉仕作業と、今日われわれが神学的根拠を基にして、取り組んで行こうとしているキリスト教教育とは、本質的に差異が大きいからである。

然し、今日のキリスト教教育のありかたを検討するとき、惜しくも、まだロバート・レイクスの段階にあるものや、少し進んではいるがやはり同じカテゴリーに属するもの、たゞ人形芝居、ペプサート、紙芝居などによって聖書の物語を話すことが即ちキリスト教教育だと思っているものなど、キリスト教教育に似て非なるものが、多々あるのに気づく。

キリスト教教育を、ロバート・レイクスの奉仕作業段階から脱して、いわゆるキリスト教教育と称され、その位置づけをさせた最大なる助力は、キリスト教教育に対する神学的反省であったと言わねばならない。もっとも、百年ばかり前に、ホーレス・ブシュネル (Horace

Bushnell, 1802～1876) が、その著 Christian Nurture を通して、こどもの宗教教育の可能性を説いたことは有名だが、そして彼の主張する多くの点は現代のキリスト教教育に役立って来たが、彼もこどもの宗教教育論者に過ぎず、宗教教育を系統的に神学的検討を加えた者だとは言えない。正しく、ミラー (Randorf C. Miller) が言う通り、「ホーレス・ブシュネルは、ひどい抑圧と過剰な罪責意識からのこどもの解放者であり、クリスチャンの家庭に育つ普通のこどもの使徒であった。」<sup>o(註1)</sup>

1941 年に至って、スミス (H. Shelton Smith) は、キリスト教教育をキリスト論と教会論の視点から展開して、「聖書における神の国理解とアナログな終末論的構造をもち、人間歴史の窮境にもかかわらず、イエス・キリストにおいて神の支配が発動しているという信仰に基いて、人間を教え育てる創造的共同体としての教会を考慮するものである。」<sup>o(註2)</sup>と指摘した。

これを受けて、ヴィース (Paul Vieth) を長とした研究委員会は、1946 年に国際宗教教育協議会 (International Conference of Religious Education) に、キリスト教教育は神学的認識を基礎として行わなければならないという研究報告を提出したが、抽象的であり、具体性を欠くきらいがあった。

キリスト教教育を神学的に体系化したもののうち、1950 年代以後のミラー (Randorf C. Miller) 及びスマート (James Smart) は、特に挙げられるべき人物である。

ミラーは、神学的基礎づけなくしては、キリスト教教育の実践はあり得ないと断言した。彼は特に、教会と言う有機体を通してキリスト教教育のあるべき姿を強調し、個々の教会が、果して聖書的な共同体であるか否かによって、キリスト教教育が決定的に影響され、成果が検討されると言うのである。

ジェームス・スマートの著「教会の教育的使命」(The Teaching Ministry of the Church) はあまりにも有名だったが、キリスト教教育の神学的基礎に意図を持って論ぜられたこの本は、福音によって人間形成のわざを目指す教会は、それ自体が教育的使命を持っている故に、教会が教育的使命を果そうとしないなら教会ではなくなる。それ故に、キリスト教教育はあくまで教会のわざであり、実践神学部門に属するのは当然であると著者は強調する。又教会とは、神が御言の中に自己を啓示されたことによって存在し、そして、これを通して神を世に証しする人間の共同体であるという。

キリスト教教育に関して、神学的論拠や検討を提出したものは、他にもシェリル (L. J. Sherrill)、ホムリハウゼン (E. G. Homrighausen) 及びワイコフ (D. C. Wyckoff) など数多いが、多様な角度からの原理的探求は、キリスト教教育の発展に貢献する所も多かったが、字数制限の為、こゝでは省略させてもらうことにする。

かくして、日曜学校から端を発した宗教教育は、その神学的根拠を探ることによって、キリスト教教育と改名され、生れ変わるべく進められて来た。そしてその神学的根拠の探求は、特に共同体である教会の本質に対する強烈なる共通関心であることを、われわれに今なお強く訴えているのである。<sup>o(註3)</sup>それである故、キリスト教教育を行う場合、何が教会であり、そのありか

たが何であるべきかを、教える人と教えられる人とが、共にそれをはっきりとらえて行わなければ、真のキリスト教教育は期待されないと云わざるを得ない。

## I. 神の恵による共同体

われわれが「教会」を言うとき、それは哲学的存在ではなく、信仰的な存在であり、抽象的なものではなくして、歴史を通しての具体的しかも人格的な人間関係を指している。それは、旧約聖書の「出エジプト」によってあらわされた神の救いのできごとに立ち帰る事によって、始めて理解が始まるものである。即ち、旧約聖書に記録されているイスラエルの選民的形成の歴史は、新約聖書のイエス・キリストによる全人類の救贖と言う歴史上最大なる出来事によって、新しいイスラエルが形成されたからである。この意味に於いて、旧約聖書のイスラエルは新約聖書のキリスト教会の原型である事はあきらかであり、神の選民の旧約的あり方がイスラエルと呼ばれるものであり、その新約的あり方が教会であるわけである。<sup>(註4)</sup>このような救いの出来事を通して、神の選民としての共同体が生かされ、養育されて来た。それであるから、われわれがキリスト教教育という課題を背負って、实际的にそれを行っていくためには、常に、われわれが神とのこういうような人格関係を根拠として形成された救いの共同体の中にあるかどうか、又その共同体の本質が変ってしまっていないかを確認しなければならない。それは、出エジプトに於ける救贖及びイエス・キリストによる全人類救贖を通して神が人と出会い、救い、生かして下さる、いわゆる神の恵のわくぐみの中の実質如何を常に問わなければならないと言うことである。こういう神の恵の中でのわががキリスト教教育である故、東西の区別もなく、老いも若きも差別なく一律に受け入れられるのであるが、たゞし、この恵による共同体のかしらであるイエス・キリストは誰であるかと言う質問に対して、共に答えようとしなければ、厳格に言って、キリスト教教育は成立しない。若し成立していると言っても、それは形ばかりであって、いつわりのものであると言わねばならない。それは何しろ神の民共同体の中に入っておらず、神の恵の共同体の外での人間的な行動にしか過ぎない。われわれの救いを可能にしたのは神の恵なのであるから、この救いのわがを理解して受け入れるためには、われわれがその恵の共同体の中で、信仰をもって、その恵に対してそれぞれの程度に応じて応答して行くことにかゝっているのである。しかもこの場合、このわがを可能にするのは、あくまでもイエス・キリストを通してあらわされた神であって人間ではない。使徒パウロは、「アポロはいったい何者か。また、パウロは何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、主から与えられた分に応じて仕えているのである。わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである。」(コリント第一書3：5～7)と言った。キリスト教教育の主体が神であることを、パウロがはっきりと力説したのである。この神が、今もなおイエス・キリストを教会(共同体)のかしらとして臨在させておられる。即ち、啓示者であり又予言者として在すイエス・キリストが、実質的に同時に又神の民共同体の教育の主体と

して働いておられるのである。それ故に、神の民共同体は、すべからくそのかしらであるイエス・キリストの命令に従って、実質的に教育のわざの責任を負わねばならない。この意味において、神の民共同体の教育即ちキリスト教教育の主体は教会であるわけである。このキリスト教教育の主体たる教会（神の民共同体）の本質を考究したのち、その本質に基盤を置いたキリスト教教育のわざを営むことこそ、当然取るべき道であると筆者は信ずるのである。

こゝに、新約聖書に直接間接表現されている教会の本質を、幾つか取りあげて論ずることにしよう。

### 1. 新しい契約に与る者

イエス・キリストは最後の晩餐の席上「これは罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」と言われた。（マタイ 26 : 28）また使徒パウロは「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念としてこのように行いなさい。」（コリント第1書 11 : 25）と重ねて強調した。まぎれもなく、これは旧い契約と対比的に言われた言葉であって、出エジプトによって現わされた神の救贖は、惜しくもその選民によって未尽もなく打ち破られたが、神はご自身が立てた契約には忠実であるので、キリストに於いて新しい契約を結ばれたのである。「たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることができないのである。」（テモテ第2書 2 : 13）とパウロは言っている。このイエス・キリストの血による新しい契約によって、新しい共同体が誕生した。即ち、この新しい契約なしには教会は存在しなかったのである。これは新約聖書の中に現わされた教会の本質的存在を端的に言った言葉であるが、教会が契約の歴史的存在である事を示したものと言えよう。(註5)

この言葉をふまえてキリスト教教育を考えると、教会がキリスト教教育の主体であると言うことは、教会が自らそういうような神との新しい契約関係にある事を証し、そういう関係を広めて行くよう努力することである。それ故、教育者自身がまずこういう新しい契約関係の中に入っていることを体験するとともに、被教育者をもこの契約関係の中に導き入れることが、キリスト教教育のわざであるということである。キリスト教教育者や被教育者がこういう体験をせずには或は期待せずにキリスト教教育がなされ完成されると思うならば、それは正しく観念的キリスト教教育であって、キリスト教教育的教育であるかも知れないが、キリスト教教育とは言い難い。

### 2. 礼拝する共同体

イエス・キリストによって立てられた新しい契約に与ったものとして自らを確認するとき、初代教会のひとびとは、自然とその契約を立てられた神に対し、礼拝をさへげたのである。ルカはこの礼拝する共同体（Worshipping Community）の特質を忘れることができなかった。それはあまりにもユニークなものであって、従来の神礼拝とは違っていただけである。「悔い改めなさい。そしてあなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。

この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである。」(使徒行伝2 : 38, 39)と記している。イエス・キリストによって罪のゆるしと救いが約束されたことを身をもって体験したからこそ、初代教会のひとびとは、「そして一同はひたすら、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。」(使徒行伝2 : 42)し、又「神をさんび」(使徒行伝2 : 47)していたのである。パウロは更に「キリストの言葉をあなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互いに教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたゝえなさい。そして……いっさい主イエスの名によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイの書3の16～17)と言って勧めた。

このように、初代教会はイエス・キリストによって結ばれた神の新しい契約に与る礼拝の共同体だったのである。彼らの頭の中には、出エジプトの歴史的救いのみ業とイエス・キリストのあがないのわざが生起し、歴史の中を通して現わされた神の変らぬ契約の恵が再現していたのである。この歴史上一貫した神の恵に与るものとして、かれらは実質的に神の支配を確認するとともに、神に対する服従をよろこびとした。<sup>(註6)</sup> しかもこういう確認と喜びは、個人的なものであると言うよりは、召された共同体の公けのつとめに他ならなかった。即ち、イエス・キリストによる新しい契約に与ったものが、共に主の食卓(聖餐)に於いて、<sup>(註7)</sup> 或は神のことばを通して、イエス・キリストによる神の恵のみわざを想起し、応答することであった。かくしてこそ、かれらは共に神の救いと支えとを体験し、「み心が天に行われるとおりに、地にも行われますように。」(マタイ6 : 10)と祈ることができたのである。このように礼拝は、神の恵の契約の再確認であり、又礼拝するものが自分を神の恵にゆだねる行為でもある。それ故礼拝の主体は神であってわれわれ人間ではない。われわれが神を礼拝することによって、神が応答するのではなく、神が歴史の中でイエス・キリストを通してわれわれ人間に働きかけられたことによって、われわれ人間がそれに応答し服従と奉仕を決心することである。

こういう礼拝をする共同体が従事するキリスト教教育のわざとは、一体どういうことなのか。それはあくまで、こうした神の恵による支配と服従をよろこぶ集りであり、大人も子どもともにそういう枠の中で体験し成長し続けることである。それは、たゞ単に形ばかりの集会ではない。それは、神の恵を再現して体験しようとする努力に他ならない。それ故、礼拝はキリスト教教育に於いても最も重要な部分であり、同時に、毎日の生活が礼拝のわざの継続である。即ち、日々神に服従し奉仕するよう心がけ実践することである。

### 3. 神の民

すでに述べた如く、イスラエルを選民として選び救いを現わされた神は、イエス・キリストによって全人類救贖の歴史的契約を成就された。これ故、イエス・キリストによって救われた人は、新しいイスラエルとして神の民に数えられたのである。ペテロは「あなたがたは、以前は神の民ではなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまはあわれみを受けたものとなっている。」(ペテロ第1書2 : 10)、また、「しか

し、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。」(ペテロ第1書2:9)と言った。かくして、教会とは、歴史の中で神ご自身によって創造された団体であって、共同体そのものの歴史意識を要求する。また、神の民である以上、神からの特権が与えられたと同時に、神の民としてのあるべき義務が負わされたのである。<sup>(註8)</sup> 神の民として生存を許されている教会は、神の民としての社会的倫理的責任をたえず問われているのである。

こういう神の民の特質をもった教会がキリスト教教育に従事するとは、いったいどういう意味なのか。それは、個人個人の責任のわざであると言うよりは、むしろ神の民即ち共同体全体の責任ある行為であらねばならない。それはなるほど個人個人が、キリスト教教育のわざを行っているのであるが、それはその個人の趣味による塾のわざではなく、新しい契約下の神の民共同体に対して、責任を持つ働きであるべきである。それであるから、教会はそれらの教育のわざに対し、常に関心と配慮を要求されると同時に、個々の教育者も、常に教会と密切な関係を保持しなければならない。こうした関係に於いて、人びとをこの神の民共同体に招き入れて、ともにイエス・キリストを主と告白するようにするわざが、キリスト教教育であるわけである。

神の民の特質を考えると、キリスト教教育に於ける教育の対象について言及する必要がある。とくに幼児の宗教性について、とかく疑問を持たれることがあるが、これはやはり聖書に於ける神の民の観念において考えられるべき問題であって、人間的能力の角度から子どもの信仰能力を推定されるべきものではない。ルターは、子どもは大人と変らず罪があり赦しが与えられるべきだと考え、家族共同体が教会の共同体の単位であり原型であると言った。アウグスチヌスは、もっと徹底的に、子どももまた罪性を持っている。子どもが大人と違うのは丈の低さであって、美しいものがあるのではないと語った。カルヴァンも児童のもつ罪性に注目し、児童に対する教会の責任を非常に重じた。パウロは児童性を拒否したのみであって、児童を拒否したのではなかった。(コリント第1書14:20)むしろパウロは、親と子との信仰的連帯性を説いた。<sup>(註9)</sup> 又パウロは家族単位の入信を促した。<sup>(註10)</sup> ブッシュネル(Horace Bushnell)が、Christian Nurtureと言う本の中で、児童をキリスト教家庭の一員として、教会が受け入れなければならないと言うことを強調した事は周知のことであるが、今日教会が幼児に洗礼を施すのは、教会がこうした神の恵による新しい契約の共同体であって、幼児をもイエス・キリストによるこの神の恵の中の一分子である事を確認する行為に他ならない。だから、「幼児に信仰があるから信仰教育が可能だと考えるよりも、キリスト信者の家庭に生れた幼児は、その存在そのものが両親の信仰を通して神の恵の中にあり、救いを約束された存在である。」と言う結論は正しい。<sup>(註11)</sup> 問題は、救いとは人間の側の能力によって決定される事ではなく、神の恵の優先を確認する信仰態度によって決定される事に帰着する。神はその恵の故に、子どもが子どもなりに行動するのを期待される。さもなければ、イエスは「幼な子をわたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である。」(マタイ19:14)と言われなかったであろう。

#### 4. キリストのからだ

教会がキリストのからだであるとは、教会の本質そのものの持っている有機的な関係を述べているのである。パウロは「あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」(コリント第1書12：27)と言明した。それはからだの肢体を切り離すことができないと言う消極的な存在だけのものではなく、共同体のそれぞれの分子が、おのおのその機能は異なるが、キリストの生命に与っている有機的生命体であることを言う。さらに教会が「キリストのからだ」であると言うとき、「キリストの」に注意すべきであって、新しい契約の共同体なる教会は、キリストによって統合され支配されている事である。器こそ相違はあるが、キリストから受ける生命による統合と支配には変りはない。それぞれがこういう有機的生命関係を確認して信仰生活を持つことそのものが、歴史の中でイエス・キリストが現在しておられることを証しするのである。それ故、純粋に個人だけのキリスト信者はいないと言えよう。

このような教会のあり方を考えるとき、教会はそれこそイエス・キリストご自身が生きて働き給うような団体であるべきであって、すべての人を体の中に導き入れる責任があるのみならず、<sup>(註12)</sup>またすべての人に対するキリストの任務を分担する義務もある。<sup>(註13)</sup>キリスト教教育を行うばあい、個人が個人の信仰を伝えるのではなくて、キリストの活きた働きとしての教会が、キリストご自身の言葉を語り、そして人を個人の下に導き入れるのではなくて、キリストの現在としての教会に導き入れる事によって、キリストのからだを強め、ますます活きた体にするのである。<sup>(註14)</sup> こういう意味からして、真のキリスト教教育は、教会が教会を強め発達させて行くわざである。

##### 5. エクレシヤ

イエス・キリストによって形成された教会は、その他の凡ゆる団体と区別されるべく、エクレシヤと名づけられたが、その名前からしてもすでに召し出された人々の意味であって、単なる人間的な団体ではなく、神的団体を指すのである事が分る。それ故に、教会はいわゆるこの世から聖別された団体になったのではなく、神より罪を赦され、み霊を注がれて形成された故に聖別されたのである。神の新たなる生命が、弟子たちに与えられたから、この弟子たちの団体である教会は「聖霊の宮」<sup>(註15)</sup> 又「聖徒」と呼ばれ、<sup>(註16)</sup>そして自づから「われは聖なる教会、聖徒の交わり……を信ず」と信仰告白をするのである。それは、教会がきずもしみもない聖潔なる人間の集団であるという意味ではなく、返って、この人間集団には限界があるが、神から与えられる聖霊の力によって、この世的なものから召し出された事を自覚して生きる共同体である。それであるから、パウロは「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを神に喜ばれる、生きた聖なる供え物としてささげなさい。……あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかをわきまえ知るべきである。」(ローマ書12：1～2)と言ったわけである。

キリスト教教育がたゞ単に聖書の文句を習うのみに過ぎず、教育者と被教育者とが、共にこういう「召された」共同体の生活を意識し実践しようとしなければ、それはまだキリスト教教

育からはほど遠いものであることは自明である。単なる聖書の授業は、キリスト教を観念的なものにし、歴史のなかで、聖霊の導きによってキリストを主と仰いで生活するエクレシヤのなすわざとは全く違うようなものにする。

#### 6. コイノニアに与る者

初代教会の生活そのものには実に美しいものがあつた。医者ルカは「そして一同はひたすら使徒たちの教を守り、信徒の交りをなし、共にパンをさき、祈をしていた。」(使徒行伝2, 42)と証言し、且つ「信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じて、みんなの者に分け与えた。そして日々心を一つにして、絶えず宮もうでをなし、家ではパンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神を讃美し、すべての人に好意を持たれていた。」(使徒行伝2:46~47)と附け加えた。それは深い喜びをもってする交りの団体であつたのである。それができたのは、聖霊の働きであつたからで、言いかえると、聖霊のコイノニアがあつた共同体のコイノニアであつたのである。神との共同体の交りにはいった故に、隣人との交りができ、又隣人との交りが、そのまゝ神との交りに結んだのである。こうした交りに於いて、神からの賜物をわかち合うことができ、キリストにあるコイノニアが実現したわけである。ミラー(R. C. Miller)は、「教会は制度(institution)である以前に交りである。しかし教会が制度としての自らを知る瞬間、交りであることを失ってしまいがちである。聖霊の共同体であろうとする限りにおいてのみ、教会はキリスト教制度であり得る。」<sup>(註17)</sup> 又「キリスト者とは、イエス・キリストおよびお互いの交りの中に召された者たちなのであって、共同体の中で、神及びお互いの関係に生きる人間として、自覚を得るのである。」<sup>(註18)</sup> カルヴァンは「キリスト教綱要」の中で、救いの確証とは、けっして個人主義的なものではなく、キリストとの交りに集められたことによって、聖徒たちの交わりを可能にし、更にそういう交りのなかに於いて、救いが確証されるのであるといった。また、神がわれわれの共通の父であり、キリストがそのからだなる教会のかしらであられる以上、互に兄弟の愛によって結ばれないということは決してありえないと言っている。<sup>(註19)</sup> そうすると、キリストにある信徒の交りの関係が、キリスト教教育での欠かせない教育の場である事は明かである。このようなキリストとの生ける出会いと交りの関係を基礎とする教育こそ、教会の本質的教育のつとめである。

このように、神は歴史の中にある神の民の交りを通して働くのであるから、キリスト教教育は特にこの共同体の交りの質について注意をしなくてはならない。共同体そのものが、救いと支えの共同体になっていないならば、教会ではあり得ないことは自明であり、同時に、こういう共同体には、他者をキリストの恵に与からせることが可能であるとは考えられない。もしわれわれが、真剣にキリスト教教育にとり組もうとするならば、あくまで、キリスト教教育が、真のキリストにある「聖徒の交わり」<sup>(註20)</sup> の中において始めて起る人格変化であることをわきまえて、そしてこの教育に与る者が、教会の本質的つとめである「交わり」を再現しようとの努力を呼び起さなければならないであろう。勿論、この努力とは、聖霊によるコイノニアから始ま



り、新しい契約の共同体の交りに参与することであることは言を待たない。

## 7. この道の者

初代教会の本質を知る上で、医者ルカが書いた使徒行伝の中で、ぜひ見逃してはならない言葉がある。それは、「この道の者」(使徒行伝 9 : 2)、「この道」(使徒行伝 19 : 23 ; 24 : 22)、「道」(使徒行伝 24 : 14)である。

初代教会は当時のひとびとから「この道」と呼ばれ、又パウロ自身も「彼らから異端だとしている道にしたがって……」と証言したのである。当時のひとびとが「この道」について最大問題だったのは、イエスが死人から甦ったキリストであることを証することだった。(使徒行伝 2 : 32 ~ 36 ; 9 : 22) 人々はどうしてもそれを受け入れることができず、異端の「道」と断定したのである。然し、われわれは聖書から、ひとびとが異端だと断定した「この道」のものが、たゞイエスが死人の中より甦ったキリストであると証ししたのみならず、礼拝し、祈り、そして使徒たちの教えを守って、深い喜びをもって共に生活をした団体であったことを知っている。(使徒行伝 2 : 42 ~ 47) 彼らにとって、イエス・キリストの死と復活とによって新しい生命に至る道が発見され、そしてその道を共に歩む喜びはたえようがなかったのである。その毎日の歩みは、教理や信条以上のもので、文字によるものではなく、霊によるものであったのである。<sup>(註21)</sup>

それは誰もが歩ける道ではなく、又どこにでも通じる道ではなかった。聖霊によってのみ、彼らはその道を見出すことができ、<sup>(註22)</sup> 死人の中より甦えられたイエス・キリストによってのみ、その「道」を歩いていることに気付き又気付かれたのであった。イエス・キリストは「わたしは道である。」(ヨハネ 14 : 6)と言われたが、正に彼らは身をもってこの「道」を体験していたのである。それでこそ、彼らは喜ばれようと異端視されようと、この「道」をひたすら進んでいったのである。中国ではクリスチャン同志を「同道」と呼んでいる。これは使徒行伝の「この道」とイエス・キリストが言われた「わたしは道である」を含めて、キリスト者が互に紹介し呼んでいる特殊名称であるが、このことばを使うたびに、初代教会の「この道」の信仰と生活のありかたに立ち返りたいものである。

かくして、キリスト教教育を実施する時、われわれはまた一つの質問をなげかけられる。それは、果してキリスト教教育者が「この道」を歩いている人なのか、又その被教育者も「この道」に導かれて共に歩いているかどうかである。こうなれば、重ねて出てくる事であるが、キリスト教教育とは決して理論や観念ではなく、実践であり、然もその実践とは、イエス・キリストを道として歩むことにつきる。イエス・キリストは十字架にかけられて死んだことは事実だと信ずる事と、イエス・キリストはわたしのために十字架にかけられて死に、わたしを救ったと証しするのとは全く違う。たゞ客観的事実を知ることと、その事実を身をもって体験して、アイデンティファイ (identify) するのとは本質的に差異がある。

イエス・キリストとは何者かと言う問に主体的に答え、そしてキリストを道として歩まない所には、真のキリスト教会の教育はあり得ないし、又被教育者と共にキリストに出会い、共に

キリストと歩まなければ、キリスト教教育が完成されたとは言えないことが自ら明かである。

#### 8. 主の訓練を受ける者

初代教会の生活そのものには美しいものがあつたが、また欠点もあつた。それは、イエス・キリストの血の契約によって神の恵に与った人たちは、贖われた罪人であつて、贖われた天使ではなかつたからである。彼らが「聖徒の交り」をしたと言うことは、彼らがきずなくしみもない聖なる人ではなく、神から与えられた聖霊の力により、この世的なものから召し出されたことを自覚して生きていた共同体であつた事を意味すると言うことは前に述べた通りである。それ故、この神の恵にあづかつたこれら罪人は、神の民として又キリストのからだとして、その名称と内容に符合すべく、常に訓練されて真の召されたコイノニアの共同体にならねばならなかつたのである。

パウロは、キリストの福音から離れて行つた者のために心を痛め、<sup>(註23)</sup> ねたみや争いを訓戒し、<sup>(註24)</sup> 党派があることを責め、<sup>(註25)</sup> 乱れた婚姻関係を正した。<sup>(註26)</sup> その他いろいろと信徒の間に起つた不信仰<sup>(註27)</sup> に対してパウロは悩み、「あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをする。」(ガラテヤ書 4 : 19)とまで言つた程である。然し、この一見して欠点だらけの教会は、今日われわれに何を伝えようとしているのか。それは、われわれが、自らの罪を認める時、十字架によって流されたキリストの新しい契約の血が、一層われわれに迫り、神の恵がますますあらわにされるためである。<sup>(註28)</sup>

キリスト教教育者は先づ自づから贖われた罪人であり、欠点のあるものであることを自覚するとともに、教えられるものも同じく赦されなければならないひとである事を覚えて、共に主の訓練(ヘブル書 12 : 5)を受け、主の薫陶と訓戒(エペソ書 6 : 4)によって育てられていかなければならない。キリスト教教育は、その被教育者のみが教えられ訓練されなければならないと思われた時、すでにその教育のあり方が崩れ、教会の教育ではなくなる。礼拝時も、授業のときも、その他すべての行事や番組が、すべて教える人と教えられる人とのためのものであり、共に主に訓練されて、活きた契約の共同体となるためのものである。

キリストの契約の血によって形成された教会の本質を、以上幾つか取りあげて述べて来たが、それが教会の本質をことごとく説明したとは思わない。何しろ、その外にも「主の羊」(ヨハネ 10 : 11, 14, 16)、「ぶどうの枝」(ヨハネ 15 : 5)、「主の友」(ヨハネ 15 : 14)、「キリストの良い兵卒」(テモテ第2書 2 : 3)、「キリストのかおり」(コリント第2書 2 : 15)など多くの名称があつて、教会の本質が人間のことばだけでは到底言いつくせないことを示唆しているのである。それだけ、このキリストの契約の血によって形成された教会の存在は、意義が深く、大変味わいがあるものであつて、同時にこの教会が課せられた課題も極めてユニークなものである。そしてこの課題を果すべく、教会がその本質を充分にあらわして行くことこそ、それが教会の教育的つとめである。教会は、何を教えようとするよりは、教会本来のありかたに、常に忠実に立ち帰ることこそ、教会の教育であり、キリスト教教育である。

## Ⅱ．キリスト教教育の主体

さて、教会の本質に立ち帰ることこそが、教会の教育的つとめであり、キリスト教教育であると述べて来たが、それならば、キリスト教教育の主体は当然キリストのからだである教会自身にあることは明確である。新しい契約に参加することも、神の民になることも、キリストの体の一部となってその特権を得ると同時に義務を分担することも、或は召された団体に参加することから、聖徒の交りの中に入ることなど……すべてがすべて、個人的企業ではなく、教会自身が果すべきわざなのである。

念の為、今まで定義された典型的なキリスト教教育の目標を、幾つか挙げてこの問題を更に考えて行こう。

近年、キリスト教教育は目ざましい発展をとげてきたが、その発展に貢献したものとして、キリスト教教育の目標設定を挙げる事ができる。事実、目標設定によって、キリスト教教育は位置づけられ、検討され、改善された。

1930 年、International Conference of Religious Education (国際宗教教育協議会) はヴィース (Paul H. Vieth) を長とする一組が作成した目標を採択した。それによると、キリスト教の宗教教育は、以下の八事項を達成しようと努めるものであるということである。

- 1) 神を意識し、神との正しい関係に人を導き養うこと。
- 2) イエスの人格・生活・教えなどを理解することによって、イエスを救い主として経験するようにする。
- 3) キリストのような性格 (Christ-like Character) を養うこと。
- 4) 神の父性と人類の同胞性という理想を具体化するような能力と気質を開発すること。
- 5) 教会に参加する能力と気質を伸ばすこと。
- 6) キリスト者の家庭の意味と重要性を認めて、その生活に参加し貢献する能力と気質を伸ばすこと。
- 7) 人生と宇宙の中に神の目的と計画を洞察し、これに基づく人生観に導くこと。
- 8) 聖書に記録されている最善の宗教的経験を持たせること。

1948 年、日本キリスト教教育協議会 (JCCE) カリキュラム委員会は、「キリスト教教育の目的は、信仰告白への備えをなし、かつキリスト者としての信仰生活を全うせしめるにある。」と決定した。

1950 年、トロントにおける世界キリスト教教育大会の報告書には、「キリスト教教育は、すべての年齢および状態の人びとを、イエス・キリストにおいて啓示された神との救いの関係に入らしめようとする。この関係は、また同時に、彼らの同胞である他の人びとの愛の関係に導き入れるものである。」としている。

1951 年、日本キリスト教教育協議会 (JCCE) カリキュラム委員会は、「教会におけるキリスト教教育の目的は、イエスを救い主と信じ、父なる神との交りに入らせ、聖書に示された神の意志にしたがって生活させることである。」と書きかえた。

1958年、リトル (Lawrence Little) が Chairman であったアメリカの National Council of Religious Education の委員会は、次ぎのようなキリスト教教育の目的を制定した。

「キリスト教教育の目的は、人々が、イエス・キリストにおいて啓示された、人を捜し求めている、神の愛に気づき、神の子として生長し、神のみ旨に適した生活を営み、そしてキリスト者の共同体と活きた関係を持ち続け得るように助けて、信仰において、この愛に応答できるようにすることである。」<sup>(註29)</sup>

同じ年に、アメリカのもう一つの委員会は、高校生の為のキリスト教教育の目的について、もっと突きとめて、次ぎのように言っている。

「キリスト教教育の目的は、人々が神の自己啓示と、イエス・キリストの人をさがし求めてやまぬ愛に気づき、信仰と愛とをもって応答するよう助けることである。そして、ついには、彼ら自身が何者であり、彼らの人間的状況が何を意味するかを知り、キリスト者の共同体に根ざした神の子たちへと成長し、あらゆる関係において神の霊のうちに生き、この世で共通に果すべきキリストの弟子としての役割を果し、そしてキリスト者の希望を持ち続け得るようにするためである。」<sup>(註30)</sup>

ミラー (Randolph C. Miller) は、キリスト教教育の目的について論述して、「……われわれは、すべての学習者が、キリストを通して神に信頼を捧げ、真にキリスト者の教会であるダイナミックな交りの中で、聖霊の力によって、キリストの弟子として生きようになるために、彼らをキリストに出合わさなければならないということである。」と言っている。<sup>(註31)</sup> そして、それであるが故に、「キリスト教教育の目的は、各個人がキリスト者として生きる決断をするように導くことである。」と端的に言った。<sup>(註32)</sup>

以上挙げた諸例から見て、キリスト教教育は、近年神学的観点から教会の宣教のわざと結びつけて考えられ進められて来たことがわかる。然し、そのかんじんな主体性については、さほどはっきりと打ち出されていない嫌いがある。教会は教育をしなければかたわの教会であると強調したジェームス・スマートの言葉は、正に、キリスト教教育の主体性は教会にあると言ったのだが、果して教会は、このような主体性をはっきりとらえ、又キリスト教教育にたづさわっている人々は、そのように把握しているだろうか極めて問題である。上に挙げたキリスト教教育の目的の諸例を見ると、誰が主体的にキリスト教教育の責任を担うのか、また実際にキリスト教教育に従事する人びとは、教会と直接どういう関係にあるべきかを指摘していない。或は、キリスト教教育のわざは、教会が、主体的に担うべきものであることを前提として、目標を定めたとも考えられよう。然し、それにしてはあまりふにおちない。教会の主体性をはっきりさせないために、教会がその責任から逃がれ、教会がキリスト教教育を可能にする場を失い、キリスト教教育に従事する人々が、教会の本質から離れて、あたかも個人の事業になってしまうのである。

キャロル・ローズ (Carol C. Rose) は、“The Westminster Dictionary of Christian Education” の中で、<sup>(註33)</sup> キリスト教教育の目的に関して書いたとき、ヴィース (Vieth) の著

“The Church And Christian Education” の文章を引用して次のように言っている。

「キリスト教教育については、色々と定義されているが、基本的には、キリスト教共同体が、老若の別なく、そのメンバーとその共同体の生活、遺産、希望、信仰及び使命を共有するにある。」<sup>(註34)</sup>

上記の如く、ヴィースが「……キリスト教共同体が……そのメンバーと……共有するにある」と言ったのは、われわれに強い示唆を与える。彼は、キリスト教教育の主体はキリスト教共同体にあることを指摘したのである。

今まで公式に制定されたキリスト教教育の目的の中で、一番はっきりと教会の主体性を唱ったのは、1971年に定めたもので、日本基督教団教育委員会が制定した教会教育の目標であると言えよう。それによると、

「教会教育の目標は、神から委託された宣教のわざとして、教会が人びとを、キリスト者の交わりへと招き入れ、彼らがイエスを主と告白し、生活の全領域で隣人とともに生きるものとなるように育てることである。

この働きによって、人びとは、主イエス・キリストに出会い、神の恵みを知り、感謝をもって主に服従し、この世における神のみ業に参与する者として、生涯にわたって成長しつづけるのである。」

また、この目標を説明して、

「今日の教会教育は、教会は教育を単に伝道的手段・方法として考えるだけでなく、教会の本来の機能、或は教会のつとめとして位置づけるという考えにたっている。つまり、教会が文化の領域特に教育の面でその使命を自覚し、それを行っていくことが、教会教育だという考えである。そうすると教会は、そこで人が生れ、キリスト者となり、キリスト者として成長する場所であるとともに、そのように人を育てる主体である。……」<sup>(註35)</sup>

とあるように、「教会が」「主体である」とははっきり書いてあるのは誠に喜ばしい事である。

### Ⅲ．結 語

以上述べた如く、キリスト教教育とは、イエス・キリストの血によって形成された新しい契約の共同体である教会自身のわざであって、一般教育の立場から理論して答案を得るというようなものではなく、むしろ歴史的にしかも具体的に把握して行かなければならない、神の恵の下での信仰のわざである。即ち、神の恵に与った人々が、神の恵に与った人々にふさわしい生活を共にすることによって証しされるわざである。それは、先づ神によって召されたために、神との関係がいやされ、そしてそれによって、隣人との関係も正しくする事ができるようになった生活である。このように、キリスト教教育はまた信仰による「関係」のわざであり、キリストによってあらわされた神との関係に始まり、そして隣人との関係によって神との関係を証しするものである。それ故、キリスト教教育は概念ではなく、又題材でもない。それは、キリストの血によって有機的に連がって生きる人びとの、神の恵に生きた存在の現れであり、その

存在の質をコミュニケーションする行動である。即ち、キリストの血による契約の共同体が、その契約の継承者を造って行くことである。(註34)

一般的に教育の方法を考えると、われわれは、すぐ何(what)を、どう(how)コミュニケーションするかを考えるが、キリスト教教育はむしろ、誰(who)がコミュニケーションするかを先づ問題にする。何(what)をコミュニケーションすることが重要ではないというのではない。何(what)をコミュニケーションするかは大事だが、それは普通考えられる「何」つまり「題材」(Subject matter)ではなく、神の恵に与る共同体の人びとの、恵にいきた生活そのものの伝達であるから「何」(what)よりも、誰(who)がそれを可能にせしめ、又可能にするかが最も大事なことになるのである。それは言うまでもなく、神がその民を召されて、神の恵に与る生活を伝達するようにされたからであるから、神がキリスト教教育の出発点であり、中心でもあるわけである。

そして、この神の民が、神の恵に与る生活を伝達する実質的な働きをする団体であるから、おのづからその団体の質如何が問われるのはあたりまえである。こういう意味で、キリスト教教育は常に教会の質如何が検討されなければならない。それ故、キリスト教教育は小さい意味での教師論、即ち一個人の教師資格を論ずるよりも、むしろ大きい意味での教師論、即ち共同体全体が教師となる資格があるかないかを検討すべきである。言い換えると、教会自体があるべき本質を保持し発揮しているかどうか、キリスト教教育が効果的にできるかどうかになるのである。教会自体が、その元来あるべき本質を発揮している時こそ、キリスト教教育がなされている時であり、まためいめいのキリスト者が、そういう恵による連帯関係にあって生活し、生長しつづけることが、教会の教育のわざをなしているのである。パウロは「あなたがたが召されたその召にふさわしく歩き……」(エペソ書4:1)と言ったのは、こういうことを裏づけるものと言えよう。然し、今日の教会は果してその召しにふさわしく歩いていて、そしてその為に教育のつとめを十分に果しているだろうか。答は極めてはずかしい。然しこの教育のわざは、教会が、主体的に担わされた避けられない使命であり、又その為に存在することを許されているのである。教会は絶えず、この重責を負わされているが、なかなかその責任を果せないと言う歎きと危機感を覚えて、努力しなければならないことを神から迫られている。

さて、キリスト教教育の主体性について、神学的に検討をして来たが、キリスト教教育とは、結局、教会自体のわざであることを強調した来たつもりである。ここで論ぜられた教会のわざとは、地方的に限られた一組織体の中のわざだけを言うのではなく、いわゆる神の民共同体ひとりびとりの日常生活の凡ての領域にわたるものである。何故なら、共同体ひとりびとりの日常生活すべてがその信仰生活の領域であるから、厳密に言って、いわゆる世俗と言うことばをもって、神の民共同体の生活を時間的及び空間的に截然と切りはなすことはできない。いわゆる世俗も又神の民共同体の信仰生活の場であり、証しの場であり、教育の場でもある。神の民共同体は、凡ての生活領域に於いて、神の民としての人格を形成し、成長して行き、又他の人びとをもそのように成るべく努めるのである。神はこの世俗である世を愛され、又贖われたの

であるから、当然、われわれは世俗不世俗の別なく、世の凡ての領域に於いて、神の贖いのみ業を現わし発展させなければならない。それ故、神の民共同体である教会は、神の恵の下に、主体的にその共同体の本質を、堅実に具体的に凡ゆる機関や機会を通してあらわさなければならない。

(註)

- 1) ミラー著、柳原光監訳「関係の教育」p.41
- 2) 山内一郎著「神学とキリスト教教育」p.38
- 3) キリスト教教育の神学的原理探究の努力は教会論の他にキリスト論も合せて論究されて来たが、ここでは教会の本質だけ取り上げて述べ、キリスト論は特にあげて論じないことを了承願いたい。
- 4) 「旧約における神の民が新約のエクレシヤに接続するという主張は、新約聖書全体を一貫している。」と高橋三郎は言っている。高橋三郎著：「教会の起源と本質」p.14
- 5) 渡辺信夫はカルヴァンの教会観を註釈して「それは信仰の把握する教会である。……これは歴史を超越した奥義ではなく、歴史であり、選びと契約の歴史、救済の歴史だからである」と言っている。渡辺信夫著：「カルヴァンの教会論」p.49
- 6) 「カルヴァンは教会が礼拝に集められるとき、キリストの名によって集められるものでなくてはならない、そしてキリストの名とは、そこを實質的に支配する力をさす。……それは人間の便宜のための参集ではない。それは第一義的に神の栄光のための服従である。」と渡辺信夫はカルヴァンの教会観を解釈している。渡辺信夫著「カルヴァンの教会論」p.131
- 7) 「主の食卓」は始めから初代教会の礼拝の中心であった。イエス・キリストが主である食卓を囲んで、神から与えられた契約を再確認するとともに、主イエス及び共同体のひとびととの間の固い交わりを心から約束する。
- 8) パウロは「御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難を共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。」と言った。(ローマ書8：16，17)
- 9) コリント第1の書7：14を参照
- 10) 使徒行伝16：31～34を参照
- 11) 日本基督教団宣教研究所第三分科編「キリスト教幼児教育の原理」p.83
- 12) ヨハネ福音書10：16を参照
- 13) ガラテヤ書6：2を参照
- 14) エペソ書4：15～16を参照
- 15) コリント第1の書3：16，17を参照
- 16) エペソ書1：1；ピリピ書1：1を参照
- 17) ミラー原著、柳原光監訳「関係の教育」p.164
- 18) ミラー原著、柳原光監訳「関係の教育」p.165
- 19) 渡辺信夫訳「基督教綱要」第4篇第1章3
- 20) 「聖徒」については「4．エクレシヤ」にて述べた。
- 21) パウロは「文字は人を殺し、霊は人を活かす」と言った。(コリント第2の書3：6)
- 22) 使徒行伝2：4～を参照
- 23) ガラテヤ書1：6を参照
- 24) コリント第1の書3：3
- 25) コリント第1の書1：12，13；3：4，5を参照
- 26) コリント第1の書7章を参照
- 27) コリント第1の書6：9～11，18～19を参照

- 28) ローマ書 5 : 20 ~ 21 を参照
- 29) "The Objectives of Christian Education", A Study Document of National Council of Churches, U. S. A., p.21-22
- 30) "The Objectives of Christian Education for Senior High Young People", A Study Document of National Council of Churches, U. S. A., p.14-15
- 31) ミラー原著、柳原光監訳「関係の教育」p.67
- 32) ibid p.67
- 33) Cully, Kendig Brubaker "The Westminster Dictionary of Christian Education", p.476
- 34) Vieth, Paul H. "The Church and Christian Education" p.193
- 35) 日本基督教団教育委員会発行「恵みによって生きる」カリキュラムガイドブック、1977、1
- 36) 「教会は神との契約に生きる共同体であり、契約の民として、この共同体の中で契約の継承者を造っていくのである。」とカルヴァンは言った。渡辺信夫著「カルヴァンの教会論」P.157 ~ 158

#### 参考文献

- Calvin, John 原著、渡辺信夫訳「基督教綱要」、新教出版社、1964
- Cully, Kendig Brubaker : The Westminster Dictionary of Christian Education, The Westminster Press, 1963
- 関西学院宗教活動委員会編「教育と宗教」、新教出版社、1965
- 藤井孝夫著「教会-その秘義をめぐって」、日本基督教団出版局、1977
- Miller, R. C. 原著、太田俊雄・中沢三千子共訳「教会とキリスト教養育」、日本基督教団出版局、1966
- Miller, R. C. 原著、柳原光監訳「関係の教育」新教出版社、1971
- 日本基督教団宣教研究所編集「キリスト教幼児教育の原理」日本基督教団出版局発行、1962
- 黒田成子・松川成夫・奥田和弘・今橋 朗共編「キリスト教幼児教育概説」、日本基督教団出版局発行、1974
- Smart, D. James, "The Teaching Ministry of the Church", The Westminster Press, 1954
- 高崎 毅・太田俊雄監修「キリスト教教育講座Ⅱ」、新教出版社、1958
- 高橋三郎著「教会の起源と本質」、新教出版社、1975
- 山内一郎著「神学とキリスト教教育」、日本基督教団出版局、1973
- 渡辺信夫著「カルヴァンの教会論」、改革社、1976